

[ギラヴァンツは北九州に何をもたらすのか - 第1回 -]

Jリーグおよびギラヴァンツ北九州を巡る2011年の話題

北九州市立大学都市政策研究所准教授 南 博

2011年7月、私は第7回アジア・スポーツマネジメント学会での研究発表のため、開催地モンゴル・ウランバートル市を訪問した。学会最終日の総会後、懇親会場への貸切バスに乗って市中心部から郊外へと移動した。木塀の中にゲル（移動式住居）が建つ興味深い住宅地の風景が途切れて草原が広がるエリアに出た際、サッカーボールを蹴って遊んでいるひと組の親子の姿が車窓から見えた。「やはりサッカーは世界で最も普及したスポーツの1つなのだな」と実感できる1コマだった。

FIFA（国際サッカー連盟）の男子サッカーランキング（本稿執筆時点で最新の2011年8月24日発表のもの）をみると、モンゴルは206カ国・地域中160位である^(注1)。サッカーの普及度合いと代表チームの強さにある程度の相関関係が存在すると仮定すると、モンゴルは決してサッカーが普及している国とはいえないであろう。しかし、そのような国でも草原でサッカーに親しんでいる親子がいるのだ。その光景に興味をもったのは私だけではなく、周囲に座ったタイの友人達も驚きの声をあげていた。そういえば以前、横綱・朝青龍が治療のためモンゴルに帰国した際にサッカーをしていた映像が流れ、日本国内で問題視される出来事があったことを思い出した。

モンゴルのFIFAランキングは、2000年2月の200位から近年は上昇しており、現在の160位は過去最高順位である。ひょっとしたら近い将来、日本とモンゴルがFIFAワールドカップやオリンピック出場をかけたアジア予選の重要な局面で対戦することがあるかもしれない。

1. はじめに

さて今回、本誌の担当者から『東アジアへの視点』に掲載する、Jリーグクラブ・ギラヴァンツ北九州についてのコラム執筆を依頼したいというお話をいただいた際、正直に申し上げると戸惑いがあった。というのも、本誌は東アジアを中心とした国際的な研究成果等が掲載される、研究機関発行の情報誌であり、はたしてそこにギラヴァンツ北九州という地域密着のスポーツクラブに関する拙文が馴染むのか、と感じたためである。しかし、担当者から「あまり難しく考えず、気楽に書けばよい」旨（ご担当者の意図は違っていたのかもしれないが、私はそのように解釈した）の助言をいただき、お引き受けすることとした。

なお、担当者が私にギラヴァンツ北九州についてのコラムの執筆依頼をお願いしたのは、ここ数年、私に関連調査研究に取り組んでいるからだと思っている。私は2007年4月に東京から北九州に移り住んで現職に就いており、地域社会や地域経済の活性化政策に関する研究・教育・地域貢献活動に携わっている。2008年1月、当時のニューウェーブ北九州（現・ギラヴァンツ北九州）から、「本クラブがJリーグに加盟した場合、どのような経済効果が北九州市に生じるのだろうか」という相談を受けた。これが、ギラヴァンツ北九州と私の最初のかかわりである。それまでJリーグを目指して九州リーグで活動してきたニューウェーブ北九州は、2008年から日本フットボールリーグ（通称JFL。日本のアマチュアサッカーリーグの最高

峰の全国リーグ) 所属に昇格することが決まっていた。Jリーグに加盟するには、JFLに参加して戦績や経営、施設等に関する一定の要件を満たすことが必要だが、そのためにはホームタウン(本拠地)の市民や各種団体、企業等から幅広い支援を受けることが必要不可欠である。従って、2008年シーズンにおいては、クラブは地域における自らの存在意義を提示し、地域からの理解をえていくことが強く求められる状況であった。その存在意義の1つの要素が経済効果であり、その推計ができないかという相談が私に寄せられたのである。

私は、経済効果もさることながら、地域の持続的成長のためには若い世代が夢をもって定住できる社会づくりが不可欠であり、その要素として芸術文化やスポーツがはたす役割も大きいと以前から考えており、北九州に移り住んで1年近くを経て、本地域ではこの要素の不足が大きな課題ではないかと感じていたところであった。またJリーグには以前から関心をもっていた。そこでクラブから受けた相談を踏まえて2008年度に北九州市立大学都市政策研究所の地域課題研究として「プロサッカーチームが北九州市に与える経済効果に関する研究」に取り組んだ^(注2)。その研究を通じ、スポーツを活かした地域活性化は北九州市にとって重要な政策課題であるとの思いを深め、2009年度以降もギラヴァンツ北九州に対する市民意識調査の実施や、スポーツによる地域活性化に関するシンポジウムの開催等にかかわってきた。JFL2年目の2009年にニューウェーブ北九州はJリーグ加盟要件を満たし、2010年からギラヴァンツ北九州に改称してJリーグ・ディビジョン2 (J2) に参加した。それを受け、2010年からは北九州市立大学がJリーグから「スタジアム観戦者調査」の実施を依頼され、私が担当してギラヴァンツ北九州の主催試合における観戦者属性や意識等に関するアンケート調査等にも取り組んでいる。

このコラムでは、読者の皆様に気軽に読んでいただけるよう、しかし、本誌の格調を落とすことのないよう、できるだけ「国際」というキーワードや、地域経済や都市政策との関連を意識しながら、Jリーグクラブ・ギラヴァンツ北九州について「ギラヴァンツは北九州に何をもたらすのか」という点について数回にわたり執筆させていただく。なお、前述の研究成果については、コラムの中で随時紹介させていただくつもりである。

すっかり前置きが長くなってしまったが、初回は、総論的に「Jリーグおよびギラヴァンツ北九州を巡る2011年の話題」について概説させていただく。次回以降は市民意識調査などからみたクラブと地域のかかわり等に触れていきたい。

2. 日本代表とJリーグ

2011年は日本にとってサッカーの話題満載の年であった。1月にカタールで開催されたAFC(アジアサッカー連盟) アジアカップでは男子サッカー日本代表が優勝。6~7月にドイツで開催されたFIFA女子ワールドカップでは“なでしこJAPAN”が見事優勝の快挙を成し遂げ、続く9月のロンドンオリンピック予選(中国山東省開催)でも勝ち抜いてオリンピックへの切符を手に入れた。同じく9月からは男子サッカーも2014年ワールドカップのアジア3次予選、並びにロンドンオリンピック最終予選が始まり本戦出場に向け戦っている。こうした日本代表チームの世界を舞台にした活躍はマスコミでも大きく報じられ、サッカーにあまり関心のなかった人々の中にも、2011年はサッカーに再注目した人が増えたのではなかろうか。

日本代表、特に男子A代表チーム^(注3)においては、近年、海外でプレーしている日本人選手の活躍が目立つ。また、国際大会で活躍した選手が九州の名門クラブの目にとまり、日本国内のクラブ

から移籍するという話は読者もよく聞かれるであろう。しかし、その国のサッカーを形づくるのは、やはり国内のプロサッカーリーグであり、日本の男子サッカーの場合はJリーグ^(注4)である。2010年に南アフリカで開催されたFIFA男子ワールドカップにおいて、日本代表は前評判を覆しベスト16まで進出し、最終的にはパラグアイにPK戦で敗れたことは記憶に新しい。試合終了直後のインタビューにおいて、キャプテン長谷部誠選手（ドイツのクラブに所属）が「（日本代表の）ほとんどの選手がJリーグでプレーしているので、（日本の皆さんは）観戦に行って盛り上げてもらいたい」旨、締め言葉で述べたことを覚えている読者もおられるのではなかろうか。むろん多くの日本代表選手はJリーグに所属し、また世界で活躍するほとんどの日本人選手はJリーグで経験と実績を積んでおり、さらに海外活動を経て帰国して改めてJリーグで活躍している選手も多い。また、Jリーグは若い世代の育成システムの強化に大変力を入れており、そのことが国際大会での日本代表の成績向上に大きく寄与しているといわれている。加えて、東アジアからも含め多くの外国人選手がそれぞれの思いで活躍の場を求めJリーグに移籍してきており、このことが日本人選手の活性化にも繋がっている。日本代表が世界を舞台に活躍し、それを通じて国民に感動と活力を与えるには、このJリーグの成長が必要不可欠といえよう。なお、これらの点について、スポーツ界においてはJリーグが特筆すべきシステムを構築しているが、グローバルな展開が当然の産業界あるいは研究者社会にとってはあたり前のシステムをサッカーにおいて構築しているに過ぎない、ともいえるかもしれない。ただ、ともすると閉鎖的になりがちなスポーツ界においてこうしたシステムを短期間で築くには関係者の多大な努力があったことは想像に難くない。Jリーグの切り開いた道は大きい^(注5)。

3. ギラヴァンツを巡る2011年の話題

さて、そのJリーグに関して、2011年は当地・北九州市において多くの話題があった。

まずは地元クラブ・ギラヴァンツ北九州の「戦績」である。Jリーグ加盟初年の2010年はわずか1勝に止まり、J2の他クラブから大きく引き離され最下位であった。しかし2011年は三浦泰年・新監督のもと、開幕3戦目で1年1ヵ月ぶりの勝利をあげると次々と勝利を重ね、本稿執筆時点の2011年9月半ば時点では10勝7分8敗の8位（20クラブ中）となっている。一時期は5位にもなった。新加入した若い選手達の活躍が著しく、将来への大きな期待も感じさせている。ただ、成績は良い時も悪い時もある。例えば後半戦に入った8月以降はなかなか勝利をあげられない状況だ。ファンやサポーターは、ある程度長い目でチームの成長をみていくことが必要だろう。これは、Jリーグに加盟したばかりのクラブを応援できる者の特権でもある。なお、本稿が発行される頃には2011年シーズンが終了している。ギラヴァンツ北九州が何位で加盟2年目を終えているか楽しみだ。

また、この戦績と結びつく形で、「北九州市の新球技場」^(注6)についても注目された。2011年2月投開票の市長選挙に際しても話題の1つとなり、また8月頃からは「ギラヴァンツが好成績を収めてもスタジアムが基準を満たさないためJ1に昇格できない」といった報道が各紙で行われた。市は建設に係る検討を予定通り進めているようだが、本稿執筆時点ではまだ計画の詳細等は明らかとなっていない。ただ、仮に整備された場合、北九州の街にとって大きなインパクトを与える施設になるであろうし、プラス方向のインパクトを与える施設となるよう、ソフト面も含め様々な工夫が行われなくてはならないと考える。この点については次回以降に改めて取り上げたい。

その新球技場の話とも関連して注目されたのが、「観戦者数」である。現在のホームスタジアムの北九州市立本城陸上競技場で開催された試合における2010年1試合平均観戦者数は4,189人でJ2下位。2011年は9月17日現在で3,985人に止まっている。その要因として雨が多かった点などもあげられるが、やはりギラヴァンツが地域にまだ十分浸透していないことが最大のポイントであろう。ただし戦績が好調となった7月以降は大幅に観戦者数が増加している点は特筆できる。この観戦者数の推移についても、次回以降で考察していく。その他、スポンサーに関する事項、財務状況、試合運営上の課題など、ギラヴァンツを巡る興味深い話題は数多くあるのだが、Jリーグ加盟2年目は、課題を少しずつ着実にこなしながら前進していく様子が伺えるシーズンとなった。

なお2011年は韓国からも若い選手が加入した。一方で昨年所属していた日本人選手が活躍の場を求めタイなど海外へも移籍した。ギラヴァンツもアジア、世界に開かれた存在になっている。

4. Jリーグと地域のかかわり—イントロダクション—

このコラムのテーマである「ギラヴァンツは北九州に何をもたらすのか」については、次回から具体的な研究結果等を用いながら述べていく。その前段階として、Jリーグと地域のかかわりについて考える際の1つの重要な視点を紹介したい。

株式会社日本経済研究所（2009）は、実態調査に基づきJリーグクラブの存在が地域にもたらす効果をまとめた上で「Jクラブは、その社会的貢献的な性格から、“ソーシャルビジネス（社会的企業）”としての性格を持つ」「Jクラブは“地域の重要無形文化財”になりうる」としている。

この視点は日本特有のものでもなさそうだ。クーパー、シマンスキー（2010, p. 125）は世界中

のサッカークラブへの取材を踏まえた上で「サッカークラブはわが身を知る必要がある。自分たちは（中略）りっぱな企業だと勘違いしてはいけない。むしろクラブは博物館のようなものだ。地域社会への奉仕を目的としながら、財政的にはそれなりに健全な公益団体のような形で生き残ればいい。」と述べている。このあたりにギラヴァンツのあり方を考えるヒントがあるのではないかと。

注

- (注1) 同ランキングでは、日本はコートジボアール、仏と並び15位である。東アジアの他国は、韓国33位、中国69位、北朝鮮114位などとなっている。
- (注2) この研究は都市政策研究所の自主的な研究として行っており、研究助成は受けていない。あくまで客観的にプロサッカークラブの経済効果について考察・推計したものである。
- (注3) サッカーのナショナルチームは年齢別に構成されているが、A代表とは年齢制限のない、その国の最強チームを指す。
- (注4) 女子サッカーの場合は、なでしこリーグがこれに該当する。
- (注5) Jリーグは1991年に設立されており、2011年は創立20周年の節目の年であった。なおJリーグが実際に試合を始めたのは1993年である。
- (注6) 新球技場はギラヴァンツ北九州の本拠地としてだけではなく、幅広い用途が検討されている。

参考文献

- 株式会社日本経済研究所（2009）『Jクラブの存在が地域にもたらす効果に関する調査（概略）』
- サイモン・クーパー、ステファン・シマンスキー [森田浩之訳]（2010）『「ジャパン」はなぜ負けるのか 経済学が解明するサッカーの不条理』NHK出版